

人給

〔殿曆〕嘉承元年正月九日壬寅、今日依吉日新車乘始先乘鹿車、件車舊車也、雖然鹿造成之後、始次チかへ物見車、乗件新作車也、余忠實著直衣冠等、又薄色指貫、戌時予參御堂、用鹿車、

元永元年十一月八日丙辰、今日内府忠通用檳榔毛新車云々、依吉被用云々、

〔倭名類聚抄十一〕副車。漢書注曰、副車會開久留萬、俗云比度太萬比後乘也、

〔箋注倭名類聚抄三〕按副車訓會閉久流万爲允、蓋今俗呼乘替者之類、比度太万比、謂令從人乘之、車、非副車也、略張良傳云、誤中副車、注謂後乘也、此併引正文也、

〔源氏物語九〕御車ども立てつゞけつれば、ひとだまひの奥におしやられて、物も見えず、
〔花鳥餘情六〕出車をば、公方より點せられて、其人に給ふ故に、人だまひとなづくるなり、

〔枕草子九〕人の家につき、しき物

よろづの事よりも、わびしげなる車に、さうぞくわろくて物見る人、いともどかし、略中まして祭

などは見でありぬべし、略中所もなく立かさなりたるに、よき所の御車、人給ひひきつゞきて多

く來るを、いづくにたゝんと見る程に、御前ども、只おりにおりて、たてる車どもを、たゞのけにの

けさせて、人給ひつゞきてたてるこそいとめでたけれ、
〔小右記〕永觀二年十二月十五日庚寅、早朝參殿、亥時姫君入内乘金、人給車十兩、朔平門陣邊、源中納

言、三位中將來迎也、
〔左經記〕長元四年九月廿五日庚午、午剋、上東門院、一條后令參石清水給、略中殿上人皆布衣、隨身

〔有職問答一〕一出車事

女車にて候攝家清花より支配に付て被借進之、其に女房被駕候、一番に二人、二番に三人、四人の間、次第に加増に而、七八輛も、或十輛も、其用候に、たがひて被進之、出すによりて、ス出車と申由を

出車